

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部・医学科・6年

氏名: 尾ノ上 祐大

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ヨハネス・グーテンベルグ大学・ドイツ・マインツ
研修期間	2019年3月18日 ~ 2019年4月18日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

私は今回の実習を通じてドイツと日本の違いを知ることができた。ドイツの医学生は5年生からオペに入り簡単な縫合や静脈路確保、A-line確保などの実技を行っており日本の学生よりもより実戦に近い形で医学を学んでいた。またドイツの医学生は将来ドイツ以外で働くことを考えている学生も少なくなかった。働く先はスイスやアフリカなど様々であったが、理由は早く主治医となり一人前の医師として活躍できること、英語が使えることであるということだった。実戦的な技術を学生中に経験し、英語が使えることでコミュニケーションを取れる。ドイツの学生がグローバルに活躍しようとする原動力がここにあるように思える。逆にドイツに来て働いている海外出身の医師の話を知ると、労働環境の事を挙げていた。ドイツでも当直や多少の労働時間延長はあるものの、基本的には16時で仕事が終わるようにオペの予定を組み、それ以上になるようであれば、しっかりと残業代が支払われるということであった。そのような労働環境の整備が他国からの医師の流入を促し、グローバルな職場や医学教育を作り上げる一因となっているように感じた。

文化的な面でまずドイツに到着して驚いたのは、電車に自転車のまま入ってきたり、電車内で少ない人がパンを食べていたり等、日本の常識ではあまりよろしくないような事が当たり前に行われている事だった。初めは日本のマナーがドイツに比べて優れているのだと考えたのだが、よくよく考えなおしてみると自転車のまま電車に乗った方が移動に便利であり、電車ですべて済ませることで時間の節約になる。ドイツでの振る舞いの方が合理的である、ということに気付いた。また、ドイツでは余暇を大切にしていた。日曜日は法律でほとんどの商店が休業しなければならないと決まっており、ほとんどの人が公園でんびりと過ごしていた。オンオフがしっかりしていて、この点も人材流入が盛んになる理由であるように感じた。過去に病院関係者によるストライキがあったとのことで、残業代の未払いをなくすこと、残業自体の抑制が図られたようだ。医療関係機関でストライキが起こると、患者に多大な影響が出るため、日本でも同様にすべき、とはとても言えないが、働き方改革が叫ばれる現状では学ぶべきものはあるかと考える。

日本とドイツの医療制度の違いの一つに私的医療保険と公的医療保険の併存を挙げる。これは日本と似た公的医療保険と別に企業が実施する私的医療保険があり、主に富裕層が加入している。私的医療保険では特定の医師の診察を受けることができる、順番待ちをある程度繰り上げることができる、などの特典がある。医療保険制度の崩壊が言われている現状では日本も議論すべき制度なのではないかと感じた。今回の実習に参加することで、このような様々な違いを現地に住む人から聞いたり、肌で感じる事ができた。これから医師として働く際にこれらの点を活かしていけるよう、努力したい。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

地域のグローバル化について、ドイツでの研修後に考えたことは、まず何よりも自分も含めて語学、特に英語のできる人材が必要であるということである。ドイツで実際に見て、雰囲気を感じてきたように、地域のグローバル化を、地域から海外に羽ばたき海外で活躍することで海外の都市と地域とをつなぐ人材が出る事、海外に羽ばたいた人材が地域に帰ってきて海外の人材の受け皿となる事、海外からその地域に魅力を感じて働きに来る事などであると考えた。そのどれにも語学力を持った人材が欠かせないと感じた。特に自分が地域のグローバル化に貢献できることは、海外人材が安心して働くことができるよう、海外の知識や価値観、言語を理解した医療を提供できるような医師となることであると思う。そのためにも今回だけでなく、機会を活かして海外留学などに参加したいと思う。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科・6年

氏名: 岸 千紗子

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ヨハネスグーテンベルグ大学・ドイツ・マインツ
研修期間	2019年3月18日 ~ 2019年4月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>今回、麻酔科のクリニカルクラークシップとして、1ヶ月間ドイツのマインツにある、ヨハネスグーテンベルグ大学病院で実習をさせていただきました。実習は朝7時45分に集合し、その日の手術内容について説明を受け、1人の麻酔科医について麻酔の導入から覚醒まで勉強するという内容でした。</p> <p>ドイツと日本の手術室での麻酔において異なると感じた点が大きく2つありました。一つ目は、手術室のシステムについてです。日本の大学では中央手術室ですべての外科手術が行われるため、麻酔科医は毎日異なる診療科の手術を担当している印象でした。一方ドイツでは、各診療科がそれぞれの建物を持っていて、手術室も分散していました。そのため、麻酔科も各診療科ごとに分けられていて、そのチームに配属されている期間はその科の麻酔のみを行うというシステムでした。</p> <p>もう一つ日本と異なっている点は、麻酔導入のための部屋が設けられているという点です。導入を別室で行う事で、手術室の準備がスムーズに行う事ができ、一日に3~4件の手術を行う事が可能でした。また、回復室とICUも手術室からすぐ近くに作られているため、患者の覚醒を確認したらすぐにどちらかに運び、すぐにつぎの患者の導入に取りかかれるという、合理的な作りになっていました。</p> <p>今回の実習では、脳神経外科、一般腹部・移植外科、脈管外科、泌尿器科をローテーションし、それぞれの麻酔の特徴について学ぶ事ができました。特に移植外科での肝移植術の際の麻酔導入を見学できた事は非常に良い経験となりました。また日本では学生がなかなか経験できない、静脈ラインの確保、気管挿管もさせていただくことができ、実際の患者さんに行う手技の難しさを学ぶ事ができました。ヨハネスグーテンベルグ大学医学部の学生は、1~4年生の間の休暇中に計3ヶ月の実習を自らコーディネートして行き、5年生でポリクリのように各科をローテートし、6年生時は研修医のような形で病院で働くというカリキュラムでした。早くから病院で実習を重ねていることで、同時期に実習していた現地の学生は手技も上手で、医療現場で即戦力として働く事ができそうでした。そのような姿にわたしも実際に医療現場で働んだという意識をもってこれからの1年間を過ごしていかなければならないと、非常に刺激を受けました。</p> <p>実習中は、英語でのコミュニケーションが基本でした。ドイツでの医学教育は日本と同じように母国語で行っているそうですが、医師、看護師、学生のほとんどが英語が流暢でした。日本では英語を理解することはできても流暢にはなせるという人は少ないので、ドイツの英語教育は素晴らしいと感じました。わたしもきちんと自分の思っている事を伝えるだけの英語力がなかったため、質問したい事があっても、英語でなんというんだろうと考えてしまい、質問できる機会を逃してしまう事が何度かありました。また、自分の意見をきちんと伝えるためにも英語を話すという点について、勉強しなければならないと強く感じました。しかし1ヶ月海外で過ごした事で、これまでは英語で話すということに高いハードルを感じていましたが、徐々にそのハードルも下がってきて実習がすすむにつれて、ただ頭の中で直訳した英語で話すだけでなく、どういう言い方をすればより伝わるのかというようなことを考えることができるようになりました。英語を流暢に話すためには、基本的なことですが日々英語を使うということが非常に重要だと実感しました。</p> <p>一ヶ月の間、たくさんの方々の助けを借りつつも、海外で生活することができたという経験は本当に貴重で、以前よりも少し自分に自信を持てるようになりました。また日本にいただけでは得る事のできない経験を、将来の選択をこれからできる学生の間で、実習に参加して本当に良かったと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習を通して、自分の語学力がまだまだだと痛感したため、今後は日頃から医学的な用語も日本語だけでなく英語でも勉強する。 ・マインツ大学で分からない事や生活で困ったことがあったときに、現地に学生に相談できる環境が非常にありがたかった。そのため、鹿児島大学に来ている留学生の日本での生活のサポートをする。 ・今回の経験で得られたことやアドバイスなどを来年以降に海外実習を考えている学生に伝えること。 	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部6年

氏名: 橋元 彩

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ドイツ マインツ大学医療センター
研修期間	2019年3月18日 ~ 2019年4月18日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

私はグローバルな視点や能力を持つためには、英語力、コミュニケーション能力、グローバルスタンダードの理解、対応力と論理的な説明力が必要だと思います。

そのため今回、ドイツ・マインツ大学医療センターへの海外研修を行うにあたり、最初に意識したのは英語力とコミュニケーション能力の向上でした。

大学入学後、私は今後の医師としての業務に役立てようと英会話の習得に励んできました。あえて英語を使わざるを得ない状況に身を置くことを通して、語学を強制的に学ぼうと考えたのです。残念ながら今回の海外研修ではドイツ語の習得までには至りませんでしたが、英会話を活用できたお陰でドイツ人スタッフとのコミュニケーションを十分に行うことができました。もちろん、会話ができればよいというものではありませんが、会話が通じることで異国での学びの可能性が大きく広がったのは厳然たる事実でした。

海外研修の最低限の前提として意識したのは英語力とコミュニケーション能力でしたが、それだけではグローバルな視点や能力が身についたことにはなりません。外国人と円滑な交流ができる程度の英語力とコミュニケーション能力を身につけた上で、グローバルスタンダードをしっかり理解しておく必要があります。

今回、ドイツの医学生らとの交流も数多くありました。その中で私が最も驚いたのは、彼らの英会話能力の優秀さと研究に向けた勤勉さでした。彼らは医学部卒業試験に向けた勉学の傍ら頻りに研究室に通い、自らの将来を見据えた準備を適切に行っていました。また、海外の大学への留学に関してもとても意欲的で、それを可能にするための準備や語学の習得も計画的に行っていました。

また、私は休日を利用してドイツ各地を回りました。ドイツ固有の文化や生活習慣に触れることで、日本とは異なる様々な体験ができました。特にニュルンベルク、フランクフルト、ダッハウの博物館、美術館、資料館、強制収容所等を訪れ、これまで知らなかったドイツ各地の生活や文化に触れることができました。特に、これまで教科書等でしか見る事のなかった戦争史跡を実際に目にしたことは、自らの今後の人生にも大きな影響を及ぼし得る体験となった気がしています。

「日本の常識は世界の非常識」こんな言葉で揶揄されることもあるように、日本人が考えていることのすべてが世界の常識と合致しているわけではありません。このような体験を経て、グローバルスタンダードを身につけるためには、交流する国の生活習慣や文化等をきちんと理解することが重要であると強く感じました。

このようなグローバルスタンダードを理解した上で、次に必要となるのは対応力と論理的な説明力です。

実はその二つの力を身をもって体現していたのが、今回実習の手助けしてくれた福井公子医師でした。福井医師は英語とドイツ語を流暢に使いこなし、ドイツ人スタッフとの意思疎通も完璧に行うことができる素敵な女性医師でした。その上、語学だけでなく麻酔に関する知識も豊富で、麻酔技術も群を抜いて優れていました。そのため、どのような状況の患者に対しても的確に対応することができていました。そして、その結果を国籍を問わず医療センター全ての同僚や研修医、学生に対して論理的に説明することもできていました。そのため、彼女を知る誰からも多くの信頼を得ており、このような素晴らしい実践家・福井医師との出会いは、医師にとっての対応力と論理的な説明力の必要性を嫌と言うほど感じるものでした。

私自身、今回の海外研修を体験しただけでグローバルな視点や能力が身についたとは思ってはいません。しかし、この一ヶ月に及ぶ海外研修において、英語力、コミュニケーション能力、対応力、論理的な説明力をレベルアップするべく私なりの精一杯の努力をしてきました。この機会を契機に、自らが目標とする「確かな医学的知識と技術を持った医師」になることを目指して、今後も精進していきたいと思っています。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

今回の海外研修を通じ、日本にとどまらず世界各地で医師としての仕事を全うするためには、確かな医学的知識と技術はもちろんのこと、英語力にコミュニケーション能力、対応力に論理的な説明力等のグローバルな視点や能力が必要であるということを実感しました。そして、今回のドイツ・マインツ大学医療センターでの海外研修は、この学びの重要性をより一層実感するいい機会となった気がします。今後も常にグローバルな視点や能力の習得を念頭に、日々研鑽を積んでいきたいと考えています。

また、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、この海外での体験をより具現化していく必要があります。そのためには、英会話だけでなく各国の言語を学び続けることを自らに課していきたいと思えます。また、他国の習慣や文化等の理解を深めるために、医学的な知識の習得だけに限らずあらゆる方面の学びも前向きに進めていきたいです。視野を広く持ち、その上で地域に住む人々に寄り添える「信頼される医師」を目指して、今後も学び続けていきたいと思えます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 境 直隆

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ソウル大学 大韓民国 ソウル
研修期間	2019年3月23日 ~ 2019年4月21日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

私は、1か月間韓国のソウル大学病院で研修を行いました。ソウル大学病院の小児神経内科に所属し、曜日ごとに朝夕に分かれ、初診外来・定期外来・脳波読影・抄読会・ソウル大学学生との共同講義・口頭試問・プレゼンテーション等を行いました。

鹿児島大学で行われているように教授の外来見学・講師による講義・プレゼンテーションといった大きな流れは変わりませんでした。しかし、その内容や行われ方には大きな違いを感じました。

外来見学の中では、実際に患者さん・その家族のおかれた状況を見ることができました。その中には、韓国の医療制度の実態や社会的な風潮からくる家族の苦悩といったものが背景にあり、実際に見て感じてみなければ学ぶことのできなかった視点や必要とされている医師の能力について学ぶことができました。

また、ソウル大学の学生との合同講義では、韓国のトップレベルの学生のポテンシャルの高さに圧倒されつつも、遅れをとらないように懸命に努力しました。グローバルなレベルで見た時の自分の未熟さを痛感させられました。ここで感じた差を心に留め、これからの起爆剤として勉学に励んでいきたいと思えます。

今回のソウル大学の実習で最も感じたことは、英語力・プレゼンテーション能力この二つが世界的に必要とされているということです。現在、誰でもいつでもどんなこともネットから調べることができます。ネットの情報を取捨選択し、自分の中で上手にまとめ上げ、スライド・言葉により、正しく理解してもらえるようにプレゼンテーションするという能力は、情報があふれている今こそ求められているように感じました。また、人に理解してもらい発展的なコミュニケーションには、言語が欠かせません。そのため、正確に自分を表現することのできる英語力を身に付ける必要があると感じました。

次に、今回私たちは3人でシェアハウスをしながら生活を送りました。大学生になると中学や高校のように長い間一緒に共同生活を送るという経験はないので、新鮮でした。もともと仲は良かったとは言え、共に生活するとなると小さなことが目に付いたり、お互いに気を使うことができず、ぎくしゃくした雰囲気になることもありました。このような状況で自分がどの様にふるまえば悪い雰囲気を打開できるかやお互いを尊重するという姿勢を本当の意味で学ぶ機会になりました。そして、一緒に生活するうちに仲間の今まで気づいていなかった良いところや大切に感じている点を知ることができ、お互いに芯の部分からより仲を深めることができたように感じています。このことは、チーム医療をやっていく上でも役立つものだと思います。

研修以外のところで何人か韓国人の友人もできました。その多くが20代後半で非正規雇用で働き日本や欧米への留学を考えていました。これには、深刻な就職難が影響しており、韓国の昨年の失業率は3・7%。20~24歳が10・9%、25~29歳が9・5%と若年層で際立って厳しいものです。K-POPや韓流ドラマがもてはやされている中、韓国の厳しい社会事情についても実感させられました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を下さった小児科の河野教授はじめ鹿大「進取の精神」支援基金にご寄付いただいた方々に感謝しています。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

私は、来年の医師国家試験に合格すれば、医師としての人生が始まります。自分が、学ばせてもらった鹿児島大学、自然豊かで人の優しい鹿児島に何かしら自分ができることはないかと考えた時、医師として県民の健康の増進に関わっていくことだと思いました。離島を多く抱え、少子高齢化がかなりの段階まで進みつつある地域も多くある鹿児島では、都心部よりも早く医師の不足がより顕著になると考えられます。私一人の力ではどうすることもできない問題ですが、制度や仕組みづくりといったおおもの部分から働きかけをしていきたいです。

また、今回の研修で学び感じたことを周囲の人と共有し、グローバル化していく社会を実感してもらうことで、地域の活性化・グローバル化に寄与していきたいと思えます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科・6年

氏名: 曾原 純

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ソウル国立大学・韓国・ソウル
研修期間	2019年3月23日 ~ 2019年4月21日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>研修を通じて学んだこととしては、大学の役割の違いがあるということだ。</p> <p>鹿児島大学は鹿児島県の医療の担い手であるのに対して、ソウル大学は国の最高学府であるという側面上、国全体の医療の担い手、最後の砦という役割を持っていた。このような違いを感じた理由としては医療的な状況の違いが背景にある。日本では完璧とは言わないまでも紹介状の制度が厳密であるとともに高度医療施設では紹介なしの患者に対する初診料が高額のため大学に来る患者数はある程度抑えられているのに対して、韓国では患者が大学で診療を受けたい多くの患者がかかりつけの病院に紹介状を書いてもらうというのが当たり前だという。日本でも似たような状況は起こりうると思うが、韓国では自分の子供の心配事にはまず何を差し置いても解決しようとするところがあるらしいとのことだ。この違いのために大学にほとんど初診の患者が大挙して来るという現実があった。</p> <p>そのため、日本以上に韓国の医療現場は疲弊していると感じた。この意味で日本ではまだ役割分担が出来ていると感じたとともに、韓国では患者をほぼ最初から最後まで診ることが出来るという側面もあると感じられた。</p> <p>また日本と韓国では入院の形態が異なり、入院の場合は、患者さんには必ず家族の1人が付き添うことが求められ、ほぼ24時間身の回りの世話をを行い、。家族が忙しくて付き添えない場合には、お金を払って介護人を雇うこともあり、最近では、多忙で付き添えない人で、かつ介護人を雇うお金が無い人のために国から援助が出るようになったとのことだ。</p> <p>さらに韓国は日本と同じように、公的な医療保険制度を採用しており、医療行為の値段もそれに準じて決まっているが、特筆すべきなのは「基本的には出来高制を採用している」点だ。韓国の小児科医曰く、もともとの医療行為の値段設定が、さほど高くないため、結果としてこれが、韓国の小児科開業医同士で、患者の奪い合いにつながってしまうのだという。かかりつけの患者さんの数を増やすためにはどうしても患者さんに言われるがままやらなければならないというわけだ。</p> <p>日本と韓国の大きな違いがこの「混合診療」の取り扱いで、日本では、混合診療は原則禁止とされており、もし保険で認められている治療法と保険で認められていない治療法が併用された場合、保険診療も含めて全額自己負担となる。それに対して韓国では混合診療が認められており、保険診療については自己負担金を、保険が適用されない自由診療については全額を負担する仕組みとなっている。その違いについて気になって調べてみたのだが、日本で混合診療が禁止されている理由としては、厚生労働省が本来は、保険診療により一定の自己負担額において必要な医療が提供されるにもかかわらず、患者に対して保険外の負担を求めることが一般化されてしまうと、患者の負担が不当に拡大するおそれがあると考えているからなのだそう。一国の医療制度や医療そのものは、その国の中だけを見ても、分かることは少なく、さまざまな国のなかで、医療のかたちを比べることで、ようやく自らの全体像を見ることができ、そうしてはじめて、自らの国の中における医療の問題点が見えてくる。日本の医療を改善していくためにも、日本の医療が他国に貢献するためにも、医療制度を国際的に比べることこそが重要なのだと感じた。</p> <p>また英語力は格段に向上した。元タリスニングに対して苦手意識があったのだが、常に英語で理解しないとコミュニケーションが進まないという状況に身を置くことによって、かなりその意識を払拭することが出来たように思える。また大学では常に医学的な事柄に対して英語での説明を受けたり、プレゼンテーションを求められたりするため、医学英語を進んで学習するように意識できた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>私は鹿児島で医療に従事していきたいと考えており、海外からの旅行者が増えていくにあたり外国人の患者にも冷静に対応しなければならぬ状況が今後必ず出てくることに対し、今回の海外実習は自分に大きな自信を付けさせてくれる経験であった。また、日本人とは異なる価値観に直面することがあるかもしれないが、そういったことに対してより柔軟に対応するための心構えが出来たように思われる。特に鹿児島に観光に来ることが多い韓国の人たちにはうまく対応することが出来ると思う。鹿児島が海外旅行者の行き先として選択されるためには外国人に対する医療の充実も求められていくと考え、今後自分が勤める病院において怖がることなく積極的に診ていくような心構えを持っていくようにしたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 野崎脩平

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ソウル大学 韓国 ソウル
研修期間	2019年3月23日 ~ 2019年4月21日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>今回の研修において、一番印象に残っているのは、他国からの留学生の英語能力の高さだ。今後よりグローバル化が進んでいくと、日本においても英語を話す機会が増えていくだろう。わかっていたつもりではあったが、他国の留学生の英語力を生で体感し私達日本人と比較をすると、完全に遅れていると言わざるを得なかった。私自身、鹿児島大学の国際交流サークルKICに所属しており、短期留学をしたり留学の受け入れをしたりと英語に触れる機会の多い医学生であると自負していたが、それでも他国とは雲泥の差であると痛感した。特に顕著にその差があらわれたのが、留学生20人程で大きな円卓を囲んで自己紹介をした時だった。アメリカ人、シンガポール人はもちろん上手いのだが、マレーシア人、台湾人、韓国人までが流暢に、豊富な語彙力で自己紹介をしていった。日本人の順番になると、自分たちはおろか他大学の学生を含めて稚拙な自己紹介しかできず、とても悔しい思いをした。根本的に、英語教育に国を挙げて力を入れるべきなのではないかと感じた。それからというもの、鹿児島に帰ってきてからは医学の勉強の合間には英語も気分転換に学習するようにしている。例えば車で移動中に英単語のCDを聞いたり、疲れたら海外ドラマを音声英語、英語の字幕で見たりしている。これらをする事で、スピーキングは難しくても聞き取りの能力は成長を実感することができている。今まで関わってきた、日本語を話せる外国の方は皆日本のドラマやアニメにハマったから覚えることができたと話していたので、私もこの逆のことができたと思う。</p> <p>また、私達の実習の内容で一番多かったのが、小児神経の外来見学であった。ソウル大学病院の特性上、韓国の難治性疾患の最後の砦であるため、レアな疾患の患者を次々と見ることができとても勉強になった。デュシャン型筋ジストロフィーや筋硬直型筋ジストロフィーの症例を多数見ることができたことで、仮性肥大や舌ミオトニア、仮面様顔貌などの特徴的な所見を経験でき、見分けることができるようになった。RETT症候群という難治性疾患の患者も多数見ることができ、その手をもむような動作や、手を口に入れたりする動作を見る機会も大変勉強になった。</p> <p>また患者数がとても多く、1人に対する診療時間がとても短くテキパキと業務をこなす様も鹿児島大学病院で見てきたものと異なるように思えた。また、先生方にソウルの料理をご馳走していただく機会もあった。そこでは食文化の違いに加え、教授と医局員の親密さ、客と店員の関係性など様々なことを体感することができた。以上のように、語学の面でも医学の面でも文化の面でも大いに刺激を受けることができたこの留学はとても有意義なものだった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>研修後に積極的に外国人の患者を引き受けられるように、これから常に医学と同時に英語の勉強を続けていこうと思う。上記の通り、車の移動時間や勉強の気分転換などの隙間時間を利用して英語を勉強し続けることで、鹿児島という地域で働きながらも英語圏の外国人の対応ができる医師の1人になれるよう努力していこうと思う。飛行機の発達、廉価によりグローバル化が進んでいる今、日本への外国人旅行者はふえる一方であり、2020年にはオリンピックも開催されることから、英語を話せるに越したことはないだろう。救急で働く際などに、どのような方が来ても臆せず診察や処置を行えるようになる。また私は個人的に、スポーツ整形の道に進んで将来はトップアスリートの身体的な健康、パフォーマンスを支えることが出来るような医師を目指していることから、英語は必要不可欠である。現在は日本においても、プロレベルになるとどのようなスポーツにおいても外国人選手が多いのが現状であるからだ。そのような選手と円滑にコミュニケーションを取り信頼関係を構築し、疾患などの情報をうまく引き出すためには英語の能力は大変役にたつだろう。このように、英語の能力はグローバル化していく社会の第一線の医師になるためには必要不可欠であると考えます。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年)： 医学部医学科・6年

氏名：米満 大智

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ディボネゴロ大学・インドネシア・スマラン
研修期間	2019年4月19日 ~ 2019年5月26日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

4/22~5/24にわたってインドネシアの都市、スマランにあるカリアディ病院にて脳神経外科の選択実習を行った。私がインドネシアでの実習を希望した理由は、途上国の医療の現場を見てみたい、そしてイスラム圏の人々の暮らしぶりを見てみたい、熱帯気候を実際に感じたいという理由からであった。

インドネシアは人口約2億7千万人、国土面積190.5平方キロ(日本の約5倍)、主要言語インドネシア語(他に約700のローカル言語)、民族マレー系約300民族、中国系、宗教イスラム教約87%、キリスト教10%、ヒンズー教2%の多民族国家である。気候は熱帯雨林気候で、4~10月が乾季、11~3月が雨季。近年経済は5~6%と高い成長率を継続しており、中進国レベルに到達している。人口は2030年代初めに3億人を突破し、2070年ごろに3億5千万人台でピークを迎えると予測され、更なる経済的発展が予測できる。今回訪れたスマランは中部ジャワ州の州都で、インドネシアの5大都市のひとつに数えられる。人口は164万人と鹿児島県の人口を上回り、沢山の車、バイクで埋め尽くされる舗装の不十分な道路を歩行者が隙間を縫って横断する光景がとても印象的だった。明朝期の鄭和の南海遠征、オランダ領期、太平洋戦争中の日本軍占領など複雑な歴史的背景を持ち、狭い範囲に様々な異文化が混在していた。

人々の暮らしは主にイスラム教の6信5行に則った規則正しいもので、5行の中で最も重要とされる礼拝を欠かさず行っていた。礼拝は一日に5回(スンニ派、シーア派は日に3回)行われ、礼拝の時間には街の至る所にあるモスクからアザーンという礼拝への呼びかけが放送される。学生は授業や実習の合間を見つけて礼拝をおこない、脳神経外科のカンファレンス中にも礼拝の時間が設けられていた。金曜日はイスラム教にとって特別な日とされており、男性は金曜日には礼拝所に集まって祈ることが義務づけられているようで、モスクに収まりきれない程の人々が病院への通学路を塞ぐほどにあふれ、病院内でも正装に身を包んだ職員や患者が礼拝所から群れを成して出てくる様子は圧巻であった。加えて、私が実習を行っている最中ムスリムはラマダーンに入り、日の出から日没までの間飲食を全くしない期間となった。後述のエマージェンシールーム(ER)で実習を行っていた私は、脱水や、低血糖などの患者が増えるに違いないと思い質問してみたが、皆慣れているので特にその様なことはないとのこと、より文化の違いを実感した。カリアディ病院での実習では脳神経外科の医局にお世話になり、手術や外来、ER、病棟での当直など様々な業務に関わらせて頂いた。手術見学では主に脳外科領域の手術を見学した。二分脊椎や女性の髄膜腫が多く見受けられ、二分脊椎は妊婦の葉酸不足、催奇形性物質の摂取、そして多数の髄膜腫はインドネシアの避妊方法に関係しているようだった。インドネシアではコンドームが市販されているものの使用率は低く、避妊は主に女性がホルモン注射や避妊リングを用いているので、女性ホルモンと関連のある髄膜腫患者の増加が起きているとのことで、インドネシアの生活と病気を結び付けて考える最初の機会となった。

次に外来実習ではインドネシアの言語の多様性を感じることができた。外来に訪れた高齢の患者さんの中には中部ジャワの言語であるJavaneseという言葉しか喋らない方もいて、公用語のインドネシア語とは全く違うため医師と意思疎通ができないことが何度かあったが、そのような場合は中部ジャワ出身の学生を通訳として使い診察を行っていた。冒頭で書いたように700近いローカル言語が存在しているインドネシアではこのような事態はよくあることのように思う。それぞれの学生の持つ地域性が医療に活かされている現場を見て、自分の地元をより学び、還元しなければという思いを持つことができた。そして、ERでは日本とは比べ物にならない数の交通外傷を見ることができた。学生も貴重な戦力として扱われ、月に4~6回の頻度でnight dutyと呼ばれる当直が義務付けられており私も4回程参加した。解放骨折や頭部外傷が一晩で十数件運び込まれ、傷の評価から処置まで一連の流れを実際に行うことができた。交通外傷の多さは東南アジア特有のバイク文化とインフラの未発達さに由来していると考えられ、特に夕方から夜にかけて事故を起こした患者が多くみられた。病棟では基礎疾患と感染症が複雑に絡み合った症例を数多く見ることができ、雨季と乾季での症例の変化も知ることができた。研修を通して宗教、食文化、インフラ環境、気候と医療との関わりを身をもって学習でき、病院の先生や生徒、患者とのかかわりの中で現地の人々の常識や考え方を若干ではあると思うが身に着けることができたとても有意義な実習であった。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

研修では地域性と医療提供に密接な関りがあること、四季のないインドネシアの人々が実際の洪水や海面上昇の被害から日本人に比べより温暖化の影響を感じ取っていることに気づいた。医療的な面では、東南アジアの玄関口ともいえる鹿児島で将来的に熱帯の感染症が流行することが現地に行くことで容易に想像でき、新興感染症や再興感染症に対して後手に回ることのないよう感染症に対する診断、治療、防疫の知識を持つことが重要だと感じた。また、生活習慣と疾患の関連も日本国内での学習より鮮明に感じることができた。例として、インドネシアでは油と香辛料をふんだんに使い、野菜摂取量の少ない食生活のせいで脳血管疾患、冠動脈疾患、糖尿病、消化器疾患が多くみられた。外国人として現地を訪れるとすぐに気づくことができるが、現地の人々にはあまり自覚がなく、自覚があったとしても同一の文化圏に居続けると他の調理方法や調味料が思い浮かばないため有効な解決策を持っていないように感じた。このような気付きを外国だけでなく自国でもすることができればより多くの人々の健康に貢献することができると思った。高齢化の進む日本において将来的に労働力確保のため近隣諸国から様々な文化をもった人々の流入が予想され、受け入れる側として予め理解を深めておくことは双方の不安を取り除き、より円滑な導入と友好を齎すことは明らかで、これからも様々な国の文化にふれ、そこで得た知識や経験を地域に還元すると共に地域を世界に発信していくような人材になりたいと思う。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 中藺 麻衣

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ディボネゴロ大学・インドネシア・スマラン
研修期間	2019年4月19日 ~ 2019年5月26日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

研修は1か月間カリアディ病院という総合病院で実習させていただきました。脳外科の手術見学や外来見学、ERでの実習を主に行いました。

脳外科では、日本の実習ではめったに診ることのない疾患が多くありました。例えば二分脊椎や結核です。二分脊椎は母親の葉酸不足で起こるといわれていますが、インドネシアでは貧富の差が激しいこと、また、私もインドネシアで過ごす中で感じましたが、野菜を食べる習慣があまりないことに原因があるのではないかと思います。そして、結核はかなり進行した段階で病院にくる患者も多く、日本では教科書でしか学ぶことのなかったことを実際の患者さんを診て学ぶことができました。インドネシアでは、体内に毒を入れるということに抵抗があり、ワクチン接種を受けない人々もおり、未だに蔓延しているそうです。

ER実習でも日本の救急とは違う光景に驚きました。インドネシアの交通事情からは容易に想像できることですが、交通事故外傷の患者さんが1日中とめどなく運ばれてきます。インドネシアは道路や信号が整備されておらず、交通ルールにも厳しい取り締まりはないため、ノーヘルメットやバイク3人乗りなど、日本ではありえない光景を目の当たりにしました。

ERでは主に、外傷の患者さんの傷を縫合したり、先生補助を行ったり、現地の学生と同じように実習をさせていただきました。日本では、実際の患者さんに対して縫合や採血や、尿道カテーテルなどの手技を行うことはなかったの、一から教えていただきました。同学年の学生はアシスタントとして毎日当直を含め、病院で手技を獲得しており、日本の研修医さながらで、自分との差を感じ、大変刺激をもらいました。

以上のような経験を通して、日本の医療の高度さを感じるとともに、国や地域が変われば医療も変わるんだということを実感しました。日本は道路もきれいに整備されており、交通ルールを守るのが当たり前です。また、衛生や保健に関してもしっかりとした制度の下、国民は医療を受けることができます。それは世界では当たり前ではありませんでした。医療は国の豊かさや、人々の生活、衛生など色々なものを映し出しているんだなと感じました。医師がどんなにたくさん働いても、研究者が良い薬を作り出しても、社会が変わらない限り患者さんが減ることはないのだと思います。病気を治すだけでなく、病気が起こる原因は何なのか、それを解決するためには何をすればいいのかということを考えて行動することも医師の一つの仕事なのだと考えました。交通事故が多いなら道路をきれいにすればいいのに、とか、結核が蔓延しないようにもっと教育や保健制度を整えればいいのかと考えるうちにその国の文化や経済など医療の視点から考えなければならないことは社会全体のことにつながるのだと感じました。

1ヶ月という短い間でしたが、たくさんの友人や先生方に支えられ、貴重な経験をさせていただきました。日本での実習とは勝手が違い、言語が違う国でその国の慣習に慣れるのは大変でした。先生方や学生とは英語で会話をしましたが、すべてを理解するのは困難でした。術野での指示やERでの手技など、間違えてはならないことはわかるまで確認しました。患者さんとは全くコミュニケーションをとれず、とても苦労しましたが、少しのインドネシア語をできるだけ使って、外国人に手当される事への抵抗を少しでも減らせればと、努力しました。

また、症例発表は初めての英語でのプレゼンでカルテ解説や患者さんからの情報収集に苦労しましたが、友人や先生方が丁寧に指導してくださり、成し遂げることができました。インドネシアの学生は日本の学生と違って、忙しく、厳しい教育を受けているようで、医学的知識も手技も実践に活かせるくらい身につけており、レベルの高さを感じました。そのような学生と1か月間実習を行い、自分に足りないところに気づき、課題がみつき、とても良い経験となりました。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

私はまだ学生ですが、医師になって実際に医療を行っていくうえで日本や鹿児島における問題点に気づくことがたくさんあると思います。治療だけを行う医師ではなく、医師だからこそ気づける社会問題に気づき、医療と社会の橋渡しをできるような医師を目指したいと思います。

私は地域枠学生なので、将来は鹿児島で地域医療に従事します。地域医療を担うからこそ今回インドネシアの実習で感じたように、その地域で何が必要なのかを臨機応変に考える力を養うことは必要だと感じました。そのためには、鹿児島にいただけでは気づかないこともたくさんあると実感したので、また今後、海外や県外で研修などする機会があれば積極的に学びに行きたいと思っています。

そのために、自分の英語力、特に医学的な英語やカルテの書き方など、困難に感じたことを反省して、今後はもっと英語で医療を学ぶという事にも積極的に取り組みたいと思いました。そして、今後も今回の実習でできた友人と良い関係を続け、医師になってからも外国での実際の医療の現状など、常に情報交換ができるように努めたいと思います。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部(医学科)6年

氏名: 渡邊 侑子

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	トロント小児病院(SickKids)・カナダ・トロント
研修期間	2019年3月22日 ~ 2019年5月24日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

カナダ・オンタリオ州にあるトロント小児病院(通称SickKids)にて、約2ヶ月間実習を行う貴重な機会をいただきました。お世話になったラボは小児神経部門の臨床神経生理学ラボで、入院での長時間脳波のモニタリングや脳磁図(MEG)を行い、てんかんの手術適応や切除範囲を評価しつつ、その集まった症例の結果をもとにより臨床に近い研究を行ってまいりました。トロント小児病院は難治性てんかんに関して広い範囲から紹介を受けているためレアな疾患も経験させていただいたほど患者の集まる病院です。ラボには多くの国籍の職員やFellowが集まっており、さらに脳波を解析する人や脳波を管理する人など役割が細分化されてまいりました。また、多くの職員がほしい17時には帰宅しており、日本の病院とは働き方が異なっていました。また、研究のお手伝いしつつ、投稿前の論文の推敲作業の議論なども先生方と一緒に経験させていただきました。私はもともと研究に興味があり、研究をしながら医療に携わりたくて医学部に入学しました。しかし、今までの授業の中では研究に触れる機会が少なく、特に臨床により近い研究というものがどのように日本や世界で行われているのかイメージがついておりませんでした。そのため今回の2ヶ月の研修では、海外での医療に触れつつ多くのてんかんの貴重な症例の集まる病院で行われている脳波の解析や手術に触れ学習すること、そしてより臨床に近い研究に触れ研究に関してさらにイメージを付け自分に何がこれから必要になるかを考えること、の2つを主に目標としました。

1つ目に関してですが、てんかんに関して貴重な症例の脳波を見つつ、先生方に多くを教えていただいたのはもちろん、日本と海外(特にカナダ・アメリカ)の医療の違いや日本の医療に足りないところについても考えさせられました。日本においては手術などの分業化があまり進んでおらず、内科においても外科においてもすべて1人で医療を行っています。しかし、カナダでは点滴のルートを取る人は脳波を読む人など、様々な専門家に別れており、1人1人の負担がより少ない印象でした。また、日本ではある程度地域ごとに機関の大きな病院が決まってしまうため、SickKidsのようにある疾患の患者に関してその症例を広い範囲から集める病院は少ないです。どちらの医療のやり方が正しいとかではありませんが、他の国の医療の良い部分を積極的に受け入れて行く姿勢が必要であると感じました。また、カナダでは大麻が合法化されたことで、街中のあらゆるところで大麻を吸っている方がいました。もともと合法化前から大麻を吸っていた人も多くマリファナがタバコのような感覚で、吸いたい人が吸っているといったふうに取り扱われている文化に大変驚きました。しかし、CBDオイルなどの医療用大麻を処方しにくいなど合法化による問題の多くある様子でした。さらに、SickKidsには様々な国籍からのスタッフが数多く所属しており、もちろんですが英語で会議をしておりました。日本で医療をする上では確かに英語は必要ないかもしれませんが、英語に関しての意識も様々な国の方と一緒に共同して医療を行うことに関しても確実に日本は遅れています。他の国では医学の授業・テストは英語で行っている国も多いですが、日本で同じように急に英語を導入するのは厳しいのは現状です。全体を変化させることは難しいですが、世界での医療の現状を同僚など他の医療従事者と共有していくのが大事だと思います。また意識して今後は普段の学習の中で、日本語だけでなく英語の単語も覚えていくなど自分にできる努力を重ねていきます。

2つ目に関しては、先生方に行っている研究のお手伝いをしつつ研究に触れられたことはもちろん、普段の様子や学会なども含めて多く先生方にお聞きすることができました。SickKidsは様々な地域から難治性てんかんの症例があつまっており、レアな症例までさまざまに学習することができました。そして、大坪先生は臨床のデータの中から特徴を掴み、あつまった症例の中から今後の研究のテーマについて考えておられました。貴重な環境で学習させて頂いているなどは思いましたが、もっともっと幅広く学習しておけばよりこの環境で学習することもさらに増えたのかなと感じます。また、研究は日々の臨床の中での気づきや今までの研究を踏まえて何を研究していくのが大事なのだと思いました。これからどんな環境で日々学習しながら医療に携わって行くのかはわかりませんが、どんな環境であっても自分に与えられた環境や人との出会いを大事にしながら自分にできる学習をコツコツと積み上げていきます。そして、まだまだ道のりは長いですが、日々の臨床での医療も大事にしつつ、研究のことも考えていける自分の目標とする医師に一歩一歩近づいていきたいです。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

私は、今年度末の国家試験を経て近い将来は医師になり多くの患者の診療にあたります。最終的には医師としての経験を積んだ後は今までの幅広い経験を活かしながら様々な角度から考察し考えていける医学研究者を目指したいと考えています。今回の留学を含め自分自身が頂いた貴重な経験の数々を活かしつつさらなる研鑽を積み、日本の医療に貢献できる医師を目指します。さらなる医学の発展のためには、最先端の研究成果を発表したり海外を含む様々な研究成果を幅広く学んだりすることも必要です。また現在日本における外国人観光客や在日外国人は増加しており、今後外国人への診療を英語で行う機会は多くなると考えられます。留学中の学びを医師や医学生を含めた周囲の方々に発信することで、より多くの方が外国での医療の現状を知り、日本や鹿児島でよりよい医療について考えられる視点が持てるよう努力をすることがまずは自分にでき求められる取り組みなのだと思います。現在すでに計画しているものでは、脳神経外科での医局向け、後輩向けの発表、同級生向けに国試の内容とも絡めて発表する予定です。また、ただ外国で見聞きたことを日本において発信するだけでなく、日本や鹿児島での取り組みや研究を世界へと発信していくことも必要です。さらに日本にて多くのことを学びそれを深め、自分から発信していくことも大事にしていきたいです。日々の学習を大切にしつつ更に多くのことを学習し、海外にも目を向けつつ、日々成長していきたいです。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科・6年

氏名: 齋藤 勝広

授業科目名	選択実習
研修先(大学・国・都市名)	ミシガン小児病院(ウェイン州立大学・アメリカ合衆国・デトロイト)
研修期間	2019年3月19日～2019年5月24日

〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。

ミシガン小児病院での研修を通して学んだことは、研究者として活躍するために必要な能力等である。具体的には、皮質脳波の解析を行う過程で、観察された現象を理解するための定量化の方法や、解析方法の工夫を学んだ。また、研究結果をまとめて学会発表するために必要な発信力等に触れ、自分に何が不足しているかについても学ぶことができた。

実習ではパソコンを用いて脳波の解析を行い、臨床研究の最前線に触れる機会をいただいた。扱った脳波の種類は皮質脳波(*1)と呼ばれるもので、研究対象は皮質-皮質間誘発電位(cortico-cortical evoked potentials: CCEPs)であった(*2)。

解析対象となった脳波のデータは10年以上かけて蓄積されたものであったが、この大量のデータを処理するために、プログラミングの技術は欠かすことはできなかった。プログラムを活用することで、解析時の一部の単純作業を自動で処理し、時間を節約しつつヒューマンエラーを排除することが可能となる。しかし、一方で頭蓋内電極は、頭皮上脳波から推定される患者のてんかん焦点に合わせて個別に留置されるため、CCEPsの解析の全ての過程においてプログラムを用いた一様な処理が行えるわけではなく、人の手による「データの整理」がある程度必要となる。私たち学生が携わったのは主にこの過程である。このデータ整理の過程で、てんかん焦点の特定方法や、異常脳波に巻き込まれて生じた脳波(スパイク)の判定方法などについて学ぶことができた。てんかん焦点と、スパイクの判定については異常脳波の出現する際のわずかな時間のズレが有力な判断材料となる。また、脳の機能的な領域を数字で表現(定量化)する際の工夫や、大量のデータを保管する際の整理の方法、解析を少しでも楽にそして作業を正確にするための簡略化の方法や、ファイルの留置場所の工夫などを学び、自分も作業に携わりながら実際に試してみることで、将来、研究者として身につけるべき工夫や考え方を学ぶことができた。

私たちが整理したデータは指導教官の作成したプログラムによって自動的に解析された。複数患者のCCEPsの解析結果は1つの脳モデルにまとめられたのだが、複数の患者で測定されたデータを1つの脳でまとめて表現するためには、個人差がある患者の脳を、標準的な脳モデルに当てはめる工夫が必要となる。この発想は大変優れていると感じたが、同時に、プログラミングの技術があるからこそできる複雑な作業だとも感じた。

加えて、今回の実習では上記の解析過程を経て出てきた結果をもとに考察を行い、アメリカてんかん学会へ参加するための要旨とポスターを作る機会までいただいた。要旨とポスターを作成し、添削を受け、発表練習をする過程で、学会への参加方法や要旨提出方法、自分の英語表現のつたなさを知り、何を修正するべきかを学ぶことができた。

(*1)皮質脳波とは、脳表面に電極を留置して測定された脳波のことである。電極が留置される目的は、てんかんの原因を作っている異常な部位(てんかん焦点)をより正確に特定し手術方針を決定するためである。一方で、言語野や運動野などの重要で正常な部位を特定するためにも皮質脳波取得のために留置された電極は有用である。具体的には、それらの電極を用いて脳を直接電気刺激することで重要な脳領域を特定することができる。例えば、解剖学的に運動性言語中枢と考えられる部位に電気刺激を加えた際に、運動性失語が起これば、その脳領域は患者にとっての運動性言語中枢と特定できる。この電気刺激を刺激部位を変えて繰り返し行うことで運動性言語中枢の広がり・領域を特定し、手術方針を決定する判断材料を得ることができる。

(*2)CCEPsは脳表面に電気刺激を加えた際に観察される特徴的な電位活動のことである。脳は各領域に機能的な役割分担を持ち、その各領域同士が連絡することで情報処理を行う臓器である。そのため、とある部位に電気刺激を加えた際に、脳内のネットワークを通じて、電気刺激を加えた部位とつながりのある遠隔部位に特徴的な電気活動が出現する。これがCCEPsである。つまり、CCEPsを解析することで、脳内の機能的なネットワークを明らかにすることができる。

〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。

今回の留学を通して見つかった、特に取り組むべき課題は主に2点ある。

1点目は英語力である。研究者として地域のグローバル化や活性化に寄与するためには、研究成果を出すだけでなく伝える力が必須となる。書き言葉で伝えることと話し言葉で伝える表現力とが必要であると感じているが、特に重要だと考えているのは会話力である。その理由は、新しい概念を創出する研究という活動には議論する力が必須だからである。今後も英会話学習を継続することで自分の考えをとっさに言葉にする訓練をしていきたい。

2点目はプログラミングの学習である。大量のデータを正しく・素早く扱い、誰よりも早く結論に到達するためには作業の効率化が重要であることを再認識した。まずは簡単な作業をするときにエクセルのマクロを使うようにし、プログラミングに親しむことから始めていきたい。

アメリカてんかん学会は2019年12月上旬に開催されるが、ここでのポスター発表でもまた新たな課題が見つかるはずである。収穫を少しでも多くできるよう、準備を整えて学会発表に臨みたい。